

Title	太宰治作品の〈笑い〉
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/44765
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	齋藤 理生
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 18306 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	太宰治作品の〈笑い〉
論文審査委員	(主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 内藤 高 助教授 荒木 浩

論文内容の要旨

現在の太宰作品の研究が精緻化する一方で、かえって手付かずにいる部分が放置されているとし、その観点から太宰の作品群において多くの〈笑い〉が孕まれているにもかかわらず、正面から論じられてこなかったとする。そして太宰における〈笑い〉の機能について、系統的に検討しようとする。

本論文は、序章と三部からなり、全九章である。付章として「織田作之助と太宰治」を置いている。四百字詰めでおおよそ五百枚である。第一部は、「方法としての〈笑い〉」で、「畜犬談」、「男女同権」、「浦島さん」の3作品を論じる。第二部は「〈パロディ〉の仕組み」で、「ドン・キホーテ」、「デカダン抗議」、「恥」、「吉野山」、「女の決闘」を対象とする。第三部は「読みの視座としての〈笑い〉」で、「春の盗賊」、「眉山」、「人間失格」を扱う。

第一部では、これまでにも〈笑い〉が指摘されてきた作品を取り上げ、小説の仕組みを分析していく過程で〈笑い〉がどのような機能を果たしているかを確かめる。太宰作品の〈笑い〉が決して表層的なものではなく、主題や構造と深くかかわったものであることを明らかにする。

第二部では、太宰が先行作品を翻案して作り上げた作品の中で〈笑い〉を含んでいるものを対象にし、物語の設定や趣向ばかりでなく、語りの構造を中心とした方法も取り込んでいることを検証する。初出雑誌という発表の舞台をも〈パロディ〉の対象としていることも考察する。

第三部では、一見〈笑い〉からはほど遠い作品群について〈笑い〉の存在を指摘し、そこから全体を新たに読み直すことを試みる。太宰の苦悩や悲劇として読まれてきた作品における〈笑い〉の役割に注目し、新たな読みの可能性を提示する。

全体を通して、太宰作品における〈笑い〉は、そこはかとなく漂うユーモアといったものではなく、きわめて戦略的に導入されたものであると結論付ける。そして、同時代の他の作家たちの作品の検討を通して、日本近代文学史における〈笑い〉の問題を位置づけることの必要を提起する。

論文審査の結果の要旨

太宰の作品における〈笑い〉を正面から論じた論文である。まず、このことを見据えた姿勢は高く評価されてよい。そして、たとえば「畜犬談」の分析についても、言葉の使われ方を極めて精緻に追いかけて、この作品の語りの特徴を洗い出すような分析の手法も、信頼感を強めるものである。「とにかく」というような、それ自体は一見何気ない言葉もきわめて計算されたものであることの検証も、読むものを納得させる説得力がある。異なる登場人物であるはずが、その言葉の使い癖によって、同質性を指摘することができるなど、首肯させる点が少なくない。どの作品においても、読者の存在を視野に入れて、太宰の方法がどのように機能しているかを検討することを見落とさないのも重要である。一貫した立場からの従来の論への挑戦には快いものが感じられさえする。

しかし、読者の問題を例にとれば、読者のレベルを一元的に把らえることが許されるのかという問題が残されている。重要な視座であるだけにより深い検討が要請されるであろう。また、慎重な態度を保持しているが、時に、語り手の考え方と作者である太宰のそれとが同じであるかのように不用意に記してしまうような部分もある。

とはいえ、「眉山」をはじめとして、少なくない作品の読み替えを要請する達成を果たしていることは疑えない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。